

## 私の誇り、小本の誇り

岩手県岩泉町立小本中学校

三年 舘崎 華

岩手県岩泉町小本地区に伝わる伝統芸能、「中野七頭舞」。踊り手はお囃子のダンツッコツコダンツコダンという音色に合わせ、大地を切り拓く七つの道具を用いて踊る。天保時代から伝わると言われる舞は、五穀豊穡、家内安全、大漁を祈願する意味が込められている。

私の住む小本地区は「中野七頭舞」が継承されている。当然のように、私の学校では、伝統を受け継ぐことがしきたりとなっていた。

今となつては、その活動は全国まで拡大し、地域の伝統とは言えないほどの継承人数である。

しかし、私には、分からなかった。どうして私の周りの大人たちは、必死になつてまで、次世代へ繋ごうとするのか。私たち若者を歴史の輪の中へ巻き込もうとするのか。

「中野七頭舞」は、小学四年生から始めて六年目となる。私たちは、先輩から教えていただいたことを、後輩に教えていくことになっている。衣装は分厚く、重い。三十度超えの時には、外で三十分ほど舞うと汗が吹き出し、足がふらつくなど熱中症の危険もあるほどの大変な踊りである。そのため正直進んでやるような伝統芸能ではなかった。

理由はもう一つある。それは、「上達スピードに、大きな個人差がある」ことだった。ダンスやスポーツなどと違い決まった動きはなく、踊り手一人一人の個性が光る。元々好きでもなかった私は、誰より上達スピードが遅く、日に日に「伝統」を憂鬱に感じていた。

中学一年生の時、地域の老人ホームの皆さんに、「中野七頭舞」を披露する機会が設けられた。私と数人は踊り手として参加せず、ただ先輩方の舞を見ていた。踊り終えた後、老人ホームの皆さんと握手を交わして驚いた。皆さんとても笑顔で、涙している人もいた。その時、私は心の中で、二つの気持ちで混同しているのが付いてしまったのだ。喜んでくれた嬉しさと、今までで経験したことのない悔しさと泣きそうになっているのを。すごい力で拳を握り締めていた。

どうして今まで気が付かなかったのだろう。私たちは伝統芸能から、こんなにもパワーをもらっていることを。この日踊れなかったことが、こんなにも悔しいということ。私は知らぬうちに、中野七頭舞がかけがえのない存在になっていたことにやっと気付くことができた。

今なら、答えることができる。どうして周りの大人たちが、次世代に「中野七頭舞」を伝えるのか。それは「見えない力」を伝統芸能が持っていることを知っていたからだと思う。「見える力」で医者や患者を治療するのならば、「見えない力」は、心にも影響し、私たちに力を与えてくれる。そのことを理解した私は、幸運であったと思う。

その時から、私はよりいっそう、保存会としての活動に力を注いだ。地面に踏みならす足や、しなやかに振る道具。その一つ一つに感謝の意と敬意を込めて。そして、忘れてはいけないのが、私たち「中

野七頭舞保存会」を支えてくださる地域の方々や家族。その存在があったからこそ、私は、力いっぱい舞うことができる。

伝統を憂鬱に思っていた私から、誇りに思えるようになったことが私の一番の成長だと感じる。「中野七頭舞」という伝統芸能が私たちにどれだけのものを与えてきてくれたのかを、私は六年かけて気付くことができた。継承の歴史の輪の中に私は入り込んでしまったが、それはとても光栄なことだと感じ、今現在は先人の背中を追い続けている。

全国の伝統芸能を継承する小中学生に伝えたい。「本当に伝えたいことは、言葉にしくたつて伝わる。私たちが、全力で伝統を大切にしてゆくことができれば、周りの人も伝統に心懸けて、後押ししてくれる」と。

これからは、私の挑戦だ。伝統芸能を絶やさず守り、大切にしていこう。後世に残し、風化させないためには、もつともつと、上達しなければならぬ。こんなふうに思えるようになったのは、この地域に生まれることができたからだ、今は心から思える。私の誇り、小本の誇り「中野七頭舞」。新しい時代でも、末永く続くことを心から願う。